

## 江口隆哉研究(Ⅱ) 門下生への影響について

桑原 和美

### はじめに

現代舞踊家・江口隆哉が逝って七年。昨、1983年12月14、15日には、七回忌を記す「江口隆哉記念・現代舞踊公演」が門下生の手によって盛大に行われた。また、彼の現代舞踊への功績を記念して(社)現代舞踊協会が新たに制定した「江口隆哉賞」第一回は、門下生の一人、西田堯が受賞した。

江口・宮舞踊研究所、夏期講習会、地方講習会、あるいは大学教育の場で、江口の指導を受けたものは多く、さらに現在でも活発な舞踊活動を行っている門下生も数多くいる。日本の現代舞踊において、多数の優れた門下生を育てた彼の功績は非常に大きいと考える。

本研究では、江口隆哉記念事業発起人を対象に行った質問紙及び面接調査、文献研究から、戦後、主として研究所の研究生に対して、彼がどのような影響を及ぼし、その成長に関わったかを考察する。

### 調査結果と考察

郵送による質問紙調査の有効回収率は、190人中86人(45%)であった。

面接調査は、10年以上江口に指事し、現在も活発な創作活動を行っている4人の舞踊家(金井美三枝、西田堯、正田千鶴、庄司裕の4氏)に依頼、実施した。

今回の質問紙調査では、昭和21年～27年頃に師事し始めた門下生が多く、また、門下生の数が最も多かったのは、昭和25～35年頃の約10年間であるという結果が示された<sup>①</sup>。しかし、これを門下生全体の傾向とみるかについては検討を要する。

また、江口に師事した動機については、「創作発表を観て」と「江口のモダン・ダンス理念や創作法に興味があった」とする者が多いことから、彼が作品によって人を魅きつける優れた舞踊家であったと同時に、理論的支柱を持つ指導者としても注目されていたことが伺われ、また、学校におけるダンスとの関連性の強かったことも認められるなど、その回答内容は、当時、江口に対して、門下生が何を求め、どのような期待を抱いていたかを推測させるものである<sup>②</sup>。

「あなたが江口先生から学んだこと、または影響を受けたことは何だと思えますか」という設問に対する回答では、「舞踊創作の方法に関して」と「モダン・ダンスの理念に関して」の項目が共に高い値を示した。そして、前者については、漠然と創作法全体を指すものから、特に創作の一過

程を挙げるなど、記述に幅が見られたが、後者については、「自分の思想・感情を表現できる」「決まった型がない」「自由に」「動きを創り出す」「個性」「表現」「自然」といった語が多く、特に江口の「舞踊創作法」の内容との関連性の強いことが認められる<sup>③④</sup>。

次に、江口の創作及び執筆活動等から、門下生への影響の及ぼし方、その成長への関わり方を考察しよう。

### 門下生への影響 — 作舞の充実と「舞踊創作法」の確立を通して

戦後社会の混乱期に、舞踊界ではバレエが急激に広がりを見せる中で、江口は、「プロメテの火」(S.25)「日本の太鼓(鹿踊り)」(S.26)「作品七番」(S.28)等、続けて代表的作品を発表した。これらの作品は、各々まったく異なるスタイルを示し、しかも多くの批評においてその質的水準の高さが認められるなど、彼自身が「舞踊創作法」の中で特に創作法の好例として多く引用していることも含めて、過去の長い実践を通して、彼が築き上げてきた理念と創作法を舞台上に形象化し得た作品と言えよう。そして、昭和26年度芸術祭奨励賞、昭和27年度文部大臣賞両賞の受賞は、この時彼の作舞が最も充実した時期を迎えていたことを裏付けるものである。

これら江口の作舞の充実期を示す作品が門下生にとって、彼から創作法を学び、大きな影響を受ける重要な意味を持っていたことは、「舞踊創作法」の記述から明らかになる。たとえば、「わたくしのやり方は、初めの“話し合い”から、“構成”“動きの生み出し”すべて相談づくですので、いや応なしに創作を体験し、この時に創作の開眼をした人が少なくない。」<sup>⑤</sup>といった例からは、門下生が単に踊り手としてだけでなく、実際の創作過程の場で、創作の一端を担い、あるいは全面的に関わりながら作品に参加したことがわかる。この他にも、特に大きな群舞では、江口の創作イメージに基づいて、表現運動の生み出しから構成に至るまで、門下生の創意工夫が大いに生かされたことが明らかである<sup>⑥</sup>。こうした体験を江口は、門下生の「勉強にはもってこい」<sup>⑦</sup>と考え、また門下生自身も「一番役に立ったのは、作品の創作過程や上演と一緒に携わったこと」<sup>⑧</sup>と述べている。そしてまた、こうした門下生との関わり方が江口が作舞の充実期を迎ええた一つの要因となったとも考えられよう。

また、江口の影響は、日常の稽古を通して門下生に大きく及ぼされている。稽古の内容は主に、「モダン・ダンスの基本運動」と称される21種類の運動と、それらを2つ以上組み合わせた総合運動から成っていた。この稽古の特色は、本来江口

が理想とする「舞踊する身体」をつくる「身体形成の術」でありながら、彼が即興的に次々と運動を変化・発展させていくことによって、より「創作力を養う稽古方法でもあった」<sup>(9)</sup>点にある。また、そうした動きの訓練の中で、折に触れて彼が創作法について指摘したと門下生は述べているが、その内容は彼が当時執筆中であった「舞踊創作法」と大いに関連していたと考えられる。

昭和28年に「作品七番」を発表した後、江口は舞踊研究誌『現代舞踊』を創刊し(昭和28~47年)、舞踊に関する記事内容の充実に努める一方、自らは「舞踊創作法」を約7年間連載執筆し(昭和28~35年)、これを結実させた。この間、同誌の発行と、「舞踊創作法」の確立に彼が大きな力を注いだことは明らかである。また、マーサ・グラム、マルセル・マルソー、ホセ・リモンらの作品鑑賞態度からは、常に舞踊創作法の確立に向けられていた彼の姿勢が察知された<sup>(10)</sup>こうした彼の思考・態度が日常の稽古や対応を通して、門下生に大きな影響を及ぼしたことは推測に難くない。自らが稽古の先頭に立ち、共に動きながら、モダン・ダンスの「本質的な捉え方をする人を、一人でも多くすることが大事で……自分の作品を、よきものにしていくことが大事だと同時に、ほんとにモダン・ダンスのわかる人を造っていくことも、モダン・ダンスという新しい舞踊を、一つの運動として押し進める上に肝要のことだからである。<sup>(11)</sup>という言葉は、彼の「モダン・ダンスの舞踊家を育てていく使命」<sup>(12)</sup>感に発し、この使命感は、『現代舞踊』の発行、「舞踊創作法」の確立といった、「モダン・ダンスの啓蒙運動」を強く押し進める彼の活動の常に根底になっている。

そして、このように江口の作舞の充実期において、実際に創作の過程を体験し、さらに日常の稽古を通して身体の技術とモダン・ダンスの理念や創作法を学んだことは、当時の若い門下生の基礎作りにおいて、生涯にも渡る重要な意味を有していた<sup>(13)</sup>

さて、昭和30年頃から門下生たちは、除々に自己の舞踊を創み出そうとする動きを見せ始める。そうした新しい息吹きに対して、「江口一派が現代舞踊に送りこむ新風の加速度的広がり」を感じると、当時ある批評家は門下生の公演評で述べている<sup>(14)</sup>無論、こうした動きには、当時アメリカのモダン・ダンス概念が急速に日本に浸透していった状況も大きく関わっている。新人の登場による世代交代とともに、日本のモダン・ダンスは大きくその様相を変えつつあり、当時の評論には新人達の種々多様な試みに対する様々な批判や危惧が表わされている。こうした若い舞踊家達が、自ら挑戦し自主的な活動を開始したことは、この期の舞踊的特徴的な傾向である。

江口門下生達の公演の特徴は、最初から単独で公演を行うのではなく、数人のジョイント形式の中で、個々の作品を発表する方式をとったことである。門下生の会の主なものとしては、「月曜会」「7人の会」「北斗の会」「モダン・ダンスの会」といったものがあつた。こうした公演形態は、会員の特に強い結びつきによるというよりは、個人の経済的負担を軽減し、自己の作品を発表できる機会を多く持つためにとられたと考えてよからう。また、このような門下生の公演や作品に対して、江口はほとんど関知せず、指摘、批評等もしないというのが一貫した態度であつたことは、門下生の一致した発言である。しかし、「個性」の尊重という彼の理念に基づくこうした態度は、かえって門下生に自己の個性や可能性を発見させる機会と時間を与え、さらに自己の舞踊の個性的なスタイル、テクニクを発揮し、安定したものにさせることに結びついたといえよう。

このように、江口が作舞の最も充実した時を経て、『現代舞踊』を発行し、その中で主に「舞踊創作法」の確立にその姿勢を傾けていった時、門下生達はそれまでの創作体験や日常の稽古を通して得たモダン・ダンスの理念や創作法を基礎として、着実に次の時代を築くべく、自己の舞踊世界へと踏み出していった。さらに、「舞踊創作法」結実以後も、「続・舞踊創作法」において、さらにモダン・ダンスの理論的確立を図り、対談や座談会などを通して常に自ら学ぶ、江口のゆるぎない研究姿勢・態度、そしてまたそれらを含めた人間性や指導力は、自ずと彼を中心に、自由で、個性や創造精神を尊重する、しかも親近感のある稽古場の雰囲気を作り出していた。

現在、江口の作風を継ぐ者はいないと言われる。しかし、その理念と方法は、門下生の中に深く沈潜し、彼の死後七年を経てもなお、「知覚しにくいけれど、幻想ではなく、事を起こし、事を展開させる力を秘めた」<sup>(15)</sup>“体質”として認められる程、大きな影響力を及ぼしたのである。

#### < 註 >

- (1)×(2)×(3) 質問紙調査結果の詳細については、学会発表資料参照。
- (4)×(8)×(9) 面接調査結果については、学会発表資料参照。
- (5)×(7) 『現代舞踊』8巻2号、『舞踊創作法』p.281。
- (6) 学会発表資料p.16, 17参照。
- (10) 第16回舞踊学会研究発表「江口隆哉と『現代舞踊』」(『舞踊学』第7号)。
- (11)×(12) 『現代舞踊』8巻10号。
- (13) 学会発表資料表③、④参照。
- (14) 池宮信夫、『現代舞踊』2巻2号。
- (15) 合田成男、「週刊オン・ステージ新聞」第634号。「江口隆哉記念現代舞踊公演」批評。

おわりに、今回の研究に当り、調査に御協力下さった門下生の方々に記して感謝を申し上げます。